Transfer desired

- 国の新しい政治体制

実務的な内政・外交を展開

中鳴嶺雄

展開されるものと思われる。の基調としており、今後の中国の内政、外交は、より政策的、実務的にの基調としており、今後の中国の内政、外交は、より政策的、実務的にみることができよう。この新しい政治体制は「現代化」への潮流を政策の国の十一全大会は、四人組批判の下での華・鄧体制の集合的再編と

利を勝ちとった状況のもとで開かれた。 利を勝ちとった状況のもとで開かれた。 教師毛沢東主席の死去後、わが党が王洪文、張春 教師毛沢東主席の死去後、わが党が王洪文、張春

七年八月)
七年八月)
七年八月)

とで開かれた。 国内外の情勢が非常にすばらしいという状況のも第九回全国代表大会の路線が偉大な勝利を収め、第の全国代表大会の路線が偉大な勝利を収め、第のでは、大会は、林彪反党集団を粉砕し、党の

公報、一九七三年八月)

公報、一九七三年八月)

公報、一九七三年八月)

公報、一九七三年八月)

たときに開かれた。 いるプロレタリア文化大革命が偉大な勝利を収め主席が主宰し、……毛主席が自ら起こし指導して主席が主宰し、手工をは、毛主席の親密な戦友・林彪副

なかった革命的団結を力強く表している、と語っったあふれんばかりの活気と、これまでに見られなか

た。」(九全大会新聞公報、一九六九年四月)

十一全大会の意味

華・鄧体制の再編

組」批判のもとでの葬・鄧体制の集合的再編(華 今日の中国内政の"奇跡"が妥協的に現実化し のである。 国鋒が政治報告)だと見ることができよう。 であったのに対して、今回の十一全大会は「四人 とでの潮流と反潮流の妥協(周恩来が政治報告) が政治報告)、 一九六九年の九全大会が毛・林体制の形成 は新しい政治体制を編成した。文化大革命以来、 政変以来の政治的・組織的空白が埋められて、中国 八月十二日から十八日まで北京で開催され、 注目の中国共産党第一一回全国代表大会が去る 四人組」という共通の敵に出会ったがゆえに 七三年の十全大会が林彪批判のも (林彪 つま

剣英、鄧小平、李先念、汪東興の各副主席 中国通信 中国通信 中国通信 マスティー 期中央委員会の選挙で投票する(右から)華国鋒主席、葉



った。 勝、吳法憲、葉群、汪東興、 達 わき起こった」という。このときの大会で主席台 親密な戦友・林彪副主席の名が読み上げられたと 新聞公報によると、 勝利をたたえた九全大会の諸文献があるが、その 革的論理からの決別を明らかにした大会でもあっ た。いま、 前列に並んだのは、林彪のほか、周恩来、陳伯 そして、今回の大会は、文化大革命の終焉と文 満場に、しばし鳴りやまぬ嵐のような拍手が 康生、江背、張春橋、姚文元、謝富治、黄永 とこに一九六九年四月の文化大革命の 「偉大な指導者毛主席とその 温玉成の一二人であ

あれから八年余、中国の政治舞台に残っているのは汪東興ただ一人である。つまり、林彪、陳伯のは汪東興ただ一人である。つまり、林彪、陳伯彦まにののしられるようになって、なお文化大革命の時利を語らねばならないという深刻な矛盾をがまに称るは『四人組』粉砕を標識として勝利のうちに森を閉じたことを宣言した」と述べ、実質的には文化大革命からの決別を明白に意思表示したのであった。

苦渋に満ちたものである。冒頭の引用が示すよう側をすべての標識にして語られていることはいえだが、このような決断は、いかに「四人組」打

に、今回を含めて過去三回の党大会で中国共産党に、今回を含めて過去三回の党大会で中国共産党に、今回を含めて過去三回の党大会で中国共産党に、今回を含めて過去三回の党大会で中国共産党に、今回を含めて過去三回の党大会で中国共産党に、今回を含めて過去三回の党大会で中国共産党に、今回を含めて過去三回の党大会で中国共産党に、今回を含めて過去三回の党大会で中国共産党に、

現代化」を基本政策に

50 同年夏以降に鄧小平氏らが作成した。三大綱領 第四期全国人民代表大会での周恩来政治報告や、 文革への潜在的潮流を政策化したものだといえよ 全面的に継承しようとするものであり、 た。このような内政の基調は、一九七五年一月の ようとしていることを宣言した重要な大会であっ いよいよ本格的な工業化、社会主義建設に着手し つの現代化」を党規約のなかに明示して、中国が てとり入れ、「農業、工業、国防、 いた中国社会現代化への潮流を党の基本政策とし (「総綱論」「工業二〇条」「科学院提綱」) このような矛盾に直面しつつも、 すでに一九七五年の杭州事件などに発露し 今回 科学技術の いわば脱 0 大会

う。だが今回の党大会は、前回の十全大会が『毛沢東思想』相対化への衝動を伴らべきものであろだとすれば、このような政策基調は、当然「毛



されるべきことを、積極的に肯定したばかりか、 夫人への感情)によって中国政治のすべてが決定 行わなかったのに比して大きく状況を異にしてい 沢東以後。への配慮から毛主席個人の位置づけを 込まれたのであった。 新しい党規約の中にも毛主席個人の偉大さが書き 人の意思や指示、感情(「四人組」やその妻、 た。すなわち、今回は華国鋒政治報告が毛主席個 江青

に思われる。 よって自己の地位の安全を期そうとしているよう を積極的に防止し、それをさらに補強することに ものとは大きく矛盾する方向だといわざるを得な っており、 護身符にしている華国鋒主席その人の位置を物語 だ」という毛主席の言葉を自己の正統性の最大の い。それだけに華国鋒主席は、毛沢東神話の崩壊 このことは結局、 中国社会現代化への政策基調が目指す 「あなたがやれば、私は安心

新 体 制 0 性 格

を図ったことは、今後の中国内政・外交がより政 汪東興)に限定して、 華主席と四人の副主席(葉剣英、鄧小平、李先念、 注目に値しよう。 確定した。なかでも、党中央政治局常務委員会を 策的・実務的展開を遂げるものと思われるだけに、 十一全大会は、中国の新しいリーダーシップを 最高政策決定機関の機能化

> 東興ら文革派非上海グループないしは 以外の毛沢東側近と鄧小平を頭とする四実権派 月九日号—参照)、 登場の重大な意味」= たように(この点については、拙稿 れたものを見ざるを得ない。 「走资派」勢力との政治的妥協によって再編成さ だが、鄧小平再復活の経緯が明白に物語って 今回の新体制は、華国鋒、 「世界過報」一九七七年 「恐小平氏再 「四人組 26

掌握していることの意味は大きいであろう。 時に彼は党中央弁公庁主任を兼ねて党内の実務を カギを握っていた汪東興氏が副主席に昇格し、 系統の実務派長老が両者の調整役になっているこ に特務公安関係の重鎮であり、北京政変の帰趨の ともほぼ明白である。とくに、華国鋒主席と同様 この場合、葉剣英、李先念両副主席らの周恩来 固

華・汪コンビ

国鋒グループといってよいであろう。 も思われるものである。以上のリーダーたちを華 第三書記の政治局入りとともに『華国鋒人事』 演じた蘇振華海軍第一政治委員や彭冲上海市党委 いずれも政治局に地位を占めたのであった。 らであり、彼らは同じく北京政変に貢献し、 首都民兵総指揮の倪志福(北京市党委第二書記) たのは、北京市長の呉徳 人組」の基盤であった上海の工作に重要な役割を こうした華・汪コンビネーションを補強してき (北京市党委第一書記)、 今回 四四



隊司令をはじめ、章国清広州部隊政治委員らの軍 茂(吉林省第一書記)、 務派、ウランフ、趙紫陽ら旧実権派、それに劉伯 長、陳慕華対外経済連絡部長らの国務院の中堅実 の中堅、余秋里国家計画委主任、 に鄧小平氏を支持しているものといえよう。 団第一書記)ら多数の旧実権派の有力幹部が広範 おり、さらに中央委員クラスでは、羅瑞卿 これに対して鄧小平グループは、許世友広州部 徐向前、 陳丕顕(元上海市党委第一書記)、 聶栄臻らの軍長老を支持基盤として 胡耀邦(元共産主義青年 方毅科学院副院 (元総 王思

当面、葉剣英、李先念らの実務派長老の意向や、大きい、両者のバランスは保たれようが、そもそもして、両者のバランスは保たれようが、そもそも「最後まで悔い改めない走資派」として復活し、その本質は明らかに反文革、非毛沢東化路線である鄧小平がいまや大きな指導力を発揮しつつあるとからしても、そこにはとうしたパランスを崩壊させる力学が作用する可能性もきわめて大きいといわねばならない。

日月を追って詳しく語りながら、鄧小平再失脚をの"陰謀"と毛主席の「四人組」に対する警告をそうであるがゆえに、華国鋒主席は「四人組」

れまでの"法則"であった。

との場合、

内政の諸

き、そとには再び政治の流動が生ずるであろう。をる天安門事件とその背景にはついに一言も触れある天安門事件の評価とそ、毛沢東路線への根本的な再検討を迫る課題であるだけに、そこを素通りしたのであった。やがて「四つの現代化」政策の推進過程でとのような素通りが許されなくなったと進過程でとのような素通りが許されなくなったと

鄧小平氏の対外政策

基調はいまや根本的に変化した。このような内政 までには、なお若干の時間を要するであろう。 現し、いわゆる蔣介石一派との"相互防衛条約" とし「ソ連の覇権主義に対する闘いを続行する」 社会帝国主義がより大きな危険性をもっている」 路線」を掲げ、中ソ関係については「とくにソ連 玉 上の変化が外交政策に「翻訳」されて現実化する 主張を繰り返しているのは、 を廃棄しなければならない」ときわめて原則的な び台湾海峡からの米軍撤退と軍事施設の撤去を実 る蔣介石一派との外交関係を断ち切り、台湾およ と述べ、米中関係についても「アメリカはいわゆ |鋒政治報告が依然として「毛主席の革命的外交 すでにしばしば述べてきたように、 しかし、内政が必ずや外交に反映するのが、 その表れであろう。 中国内政の 雏 ح

> てはならない。 ではならない。 ではならない。 ではならない。 ではならない。 ではならない。

政策的・選択的な国益外交

外交舞台に再登場したが、八月下旬のパンス米国 見解をもつ耿駿党中央対外連絡部長が新任の政治 米中関係の進展と台湾問題の長期的な処置を望む のことだと私は展望しているが、一方、中国側 るのは、少なくとも来るべきアメリカ中間選挙後 濃いものであって、米中国交樹立問題が本格化す 2 務長官訪中に際しては、鄧小平がホスト役を務め 後、早くも八月上旬には北朝鮮の大使と会見して する毛沢東型の戦略・戦術論的外交から、 局員に昇格していることに注目すべきであろう。 て今回の米中会談を実質的に取り仕切ったのであ 策的・選択的な国益重視の外交へと大きく方向を れにせよ中国の外交政策は、ときには国益を無視 ソ 転ずることになるであろう。 向けての背踏みであり、 た。との場合、 鄧小平氏は、 関係に反映し、またその逆があるのだが、 米中関係の進展いかんでは、いうまでもなく中 先の七月下旬の三中全会で再復活 今回のパンス訪中は米中正常化 当初から折衝的色彩の より政 いず

(なかじま・みねお=東京外国語大学教授)



古参幹部による集団 指導

華国鋒体制を支える人脈

小出良夫

が軍長老であり、軍の比重が高まったことも見逃せない。の経験豊かな古参幹部が主流となったことである。さらに古参幹部の多く正東興各副主席の五人の集団指導体制がとられたことであり、また文化大汪東興各副主席の最大の特徴は、華国鋒主席と葉剣英、鄧小平、李先念、今回の党人事の最大の特徴は、華国鋒主席と葉剣英、鄧小平、李先念、



汪東興の各副主席

正副主席で常務委を構成

中国通信

大会は、三五〇〇万人に上る全党員を代表して大会を運営し、自ら政治報告を行い、変剣英副主席が党規約改正で報告を行い、とれらの報告や新党が党規約を採択したほか、一一期の中央委員二〇一人規約を採択したほか、一一期の中央委員二〇一人規約を採択したほか、一一期の中央委員二〇一人規約を採択した。続く一中全会では、中央委主席に華国鋒、同副主席に葉剣英、鄧小平、李先念、に華国鋒、同副主席に葉剣英、鄧小平、李先念、に華国鋒、同副主席に葉剣英、鄧小平、李先念、に華国鋒、同副主席に葉剣英、鄧小平、李先念、に華国鋒、同副主席に葉剣英、鄧小平、李先念、に東国の四人を選び、華主席以下二三人の政治局にを選出、鄧小平、本社の報告を表記。

注目される汪東興氏の抜擢

関であるが、その人数は主席・副主席の五人の少軍の日常工作を統一して処理し、決定する最高機の職権を行使する政治局常務委員会は、党・政・中央委員会全体会議の閉会期間中、中央委員会

特集 中国共産党十一全大会と華体制



数にしぼられたものと解

指導制を実行するため少

された。

すなわち、

全

議長席に並ぶ中国首脳陣。写真左から華国鋒主席、葉剣英、鄧小平、李先念、

朱徳、

陳雲の

四副

主

全大会では、

毛沢東主席

ほ

とは、八全(一九五六年)委員専任者をなくしたこられた副主席以外の常務

に近いと言える。

にしぼられた。すなわ

九期、

〇期で設け

政治的経験と英知に依拠な、一人数での「集団指導と個人責任制のも、毛沢東の引退に花のも、毛沢東の引退に花のも、毛沢東の引退に花のも、毛沢東の引退に花のも、毛沢東の引退に花のも、毛沢東の引退に花のも、毛沢東の引退に花のも、毛沢東の引退に花のも、毛沢東の引退に花のも、毛沢東の引退に花のも、

中国共産党新政治局の構成

た六人で構成され

2

席と鄧小平総書記を加え

(1977年8月19日、11期1中全会選出)

は毛沢東の独断専行を

合談制つまり集団

中央委主席 華 国 鋒(56)一 2鄧 小 平 (73) 葉 剣 英 (79) 副主席 (4人) 2李 先 念 (72) 汪東興(65) 政治局常務委員会 (5人)-(政務) (党 務) (軍務) 1余 秋 里(69)新 紀 登 奎(47) 2劉伯承(85) 方 毅(68)新 徳(68) 華聶 栄 臻(78)新 3彭 冲(60代)新 2徐 向前(75)新 匙 (74)新 2、3章 国 清(71) ウランフ(73)新 陳 永 貴(62) 2、3計 世 友(71) 倪 志 福(46) 2陳 錫 聯 (64) 2李 徳 生(61) ○陳 慕 華 (60代)新 ○サイフジン(65) 2蘇 振 華(68) 2張 廷 発(60代)新 ○趙 柴 陽(58)新 中 央 政 治 局 (26人) (委員23人、候補委員3人) 中央委員会 候補委員 132人 員 200人 332人

注=氏名の前の独字は出身野戦軍(華は華北野戦軍)、後ろの数字は満年齢、○印は政治 局候補委員、新は新任

〈党員総数 3,500万人〉

集団で決定し……」(第一一条)が挿入されたの政治的経験と英知に依拠し、すべての重要問題はは集団指導と個人責任制とを結びつけ」「集団の合大会採択の新党規約に新しく「各級党委員会

3 闘争を未然に防止しようとの意図から 指導理念とし、 またこのような方針は、 **並政権が集団指導** 個人独裁と個人的 体制をポ 経済建設などの スト毛沢東 欲望による ٢ 4 体 6 制 れ





劉

伯承

武 栄源

徐向

前

それからの再出発といえるかもしれない。戻されたように、いわば「八全体制」への復帰、が「一〇大関係論」(一九五六年四月)まで引きが「一〇大関係論」(一九五六年四月)まで引き

念して日の当たる場所で華政権を支える(華勢力 せよ汪東興氏もかつての康生氏のように党務に専 妙な印象を投げかけないとはいえない。いずれに 務のポスという暗いイメージは、遊政権全体に微 来、汪氏の昇格は予想されたことではあるが、 華主席の東北視察に筆頭随行員として活躍して以 績をあげ、華主席とのつながりも深く、公安 指揮権をも握り、林彪事件、「四人組」逮捕で功 委保衛局長を兼任、党中央警護の八三四一部隊の 治局員に昇格し、党中央弁公庁主任、党中央軍事 団長として解放前から毛沢東主席の護衛を務め、 公安部副部長、政治局員候補から十全大会では政 汪東興氏の抜擢である。汪氏はかつて中央警衛団 華主席を除く四人のうちで最も注目されるのは 畑のベテランである。本年春、大慶会議後の (特 特

になろう。

古参幹部が復活

張廷発)。 平、徐向前、 よら(文革受益者=華国鋒、呉徳、紀登奎、陳永 益者と被害者の妥協による「過渡期の体制」といえ 現代化」を目指す長期的な布陣ではなく、文革受 回党大会までに相当な変動が予想され、 という老齢である。 が、総じて第二世代の少ない平均年齢六五歳前後 の二五人に近い「定数」を踏襲したものと言える 候補委員を含めて二六人の中央政治局は、 李徳生、 倪志福、 轟栄臻、 このことは、五年後の第一二 余秋里、ウランフ、彭冲、 汪東興。文革被害者—鄧小 一四つの 八期

経済(余秋里、陳慕華)、国防(羅栄臻、徐向前、革で批判されたか、あるいは失脚し、その後復活革で批判されたか、あるいは失脚し、その後復活すで批判されたか、あるいは失脚し、その後復活が出来がある。新任者の多くは文

拡大のための)重要な役割を果たすこと

新政治局の顔ぶれ

(八月十九日、一中全会で選出)

▽中央委員会主席=華国鋒 (留)

▽中央委員会副主席(四人)=葉剣英(留)、鄧

▽中央政治局委員 (二三人)

州部隊第一政治委員) 東国清(留、全国人民代表大会常務委副委員 華国鋒(留、中央軍事委主席・国務院総理)

局委員候補)長、中共中央統一戦線工作部長、八期政治長、中共中央統一戦線工作部長、八期政治

方毅(新、中国科学院副院長)

郊小平(留、中央軍事委副主席・副総理・解

劉伯承(留、中央軍事委副主席、全人大常務協全国委副主席)
第一次

許世友(留、広州部隊司令員)

委副委員長

紀登奎(留、副総理)

蘇振華(昇、海軍第一政治委員)

李徳生(留、瀋陽部隊司令員)

への補強といえる。への補強といえる。

人たちが長征以来毛沢東から冷飯を食わせられて 面軍—第一二九師—第二野戦軍系統 ち葉剣英、劉伯承、舜栄臻の三人は病気がちであ 帥」のうち生き残りの五人(彭徳懐が生存してい ツ人事」の感をなしとしない点である。「一〇元 ン、章国清)などのパランスも考慮されている 彭冲、李徳生)や少数民族 合いをみるうえで注目される。 いたことを思うならば、将来の非毛沢東化への度 た、一一人に及ぶ軍関係者のほとんどが紅第四方 るとして)のうち四人までが政治局入りした。う 地方幹部(並国清、趙柴陽、 わずか徐向前が活躍しているにすぎない。 特異なのは老軍人の選出で、軍長老の「メン 鄧小平)で占め主流となった。 (ウランフ、 蘇振華、 (劉伯承、 との系統の 倪志福、 サイフジ 徐 ま

政治局員の担当職務を定めることは難しい。仮

は務人ば、分党が

徳生 みられ、若い

李

に党、政、軍に党、政、軍と分けてみれば、副主席四人のうち、党

震林、 その勢力扶植に専念するものとみられる。政務は 紀登奎氏とともに、五年後の華体制強化のため、 ており、 される。李先念氏は次期総理の候補者ともいわれ なくもなく、また党の対外関係で耿駿氏が入って 推進を重大使命とするにしては、 クラスの政治局員選出が少なく、「四つの現代化」 するものとみられる。それにしても国務院副総理 鄧小平氏が責任をもち、李先念氏が実質的に処理 ノクラートで固めていくものとみられる。 いるとはいえ、外交ベテランの少ないことも注目 陳雲氏らがいないのは国務院軽視とみられ 余秋里氏を片腕として、行政部門をテク 谷牧、 王震、 譚

軍の比重高まる

あったということである。建国後の八全、九全、れたことは、十一全大会は「団結、勝利の大会」で葉剣英、鄧小平両副主席らの演説に共通していわ葉剣英、鄧小平両副主席らの演説に共通していわまり、華国教主席、

党委第一書記·革命委主任)

汪東興(留、中共中央弁公庁主任)余秋里(新、副総理兼国家計画委主任)

張廷光(新、空軍司令員)

陳永貴(留、副総理)

陳錫聯(留、副総理・北京部隊司令員

耿氏(新、中共中央対外連絡部長)

常務変副委員長)

徐向前(新、中共中央軍事委副主席・全人大主任)

彭 冲(新、上海市党委第三書記・革命で常務委副委員長)

▽中央政治局委員候補(三人

任) 任) 任)

革命委主任・新疆部隊第一政治委員) 員長・新疆ウイグル自治区党委第一書記・サイフジン(賽福鼎)(留、全人大常務委副委

念(新)、汪東興(新)
□ 中央政治局常務委員会委員(五人)
□ 中央政治局常務委員会委員(五人)

8月19日に開かれた一中全会 中国通信



今次大会が第一次文革の終結を宣言し「継続革が決して永続きしなかったことも事実である。す金の言葉を耳にしたものである。しかし、この言葉の言葉を耳にしたものである。しかし、この言葉

本、国防、科学技術の「四つの現代化」を実現し、生活水準の向上を目指すことを重点とする以上、人民大衆は指導層の団結と安定こそ望み、もはや二度と混乱、破壊、停滞、密告といった暗いはや二度と混乱、破壊、停滞、密告といった暗いはや二度と混乱、破壊、停滞、密告といった暗いはか一つの時)に事を処理すれば、その回復も夢ではなかの辞)に事を処理すれば、その回復も夢ではなかの辞)に事を処理すれば、その回復も夢ではなかの辞)に事を処理すれば、その回復も夢ではなかの辞)に事を処理すれば、その回復も夢ではなかの辞)に事を処理すれば、その回復も夢ではなかの辞)に事を処理すれば、その回復も夢ではなかの辞)に事を処理すれば、その回復も夢ではなかの辞)に事を必要を表している。

ぜしめるとの見方が出ている。 近代的国防工業の発展に今後大きな発言力を持つ 征以来の経験豊かな古参幹部が主流となったこと れゆえに数年足らずして入れ替えなければならな 老の選出は政治局の平均年齢を飛躍的に高め、 復活をした鄧小平氏を強力に支持した。 ことは当然であろう。加えて彼らの多くは奇跡 見逃せない。彼らの多くは軍近代化論者であり、 多くが軍長老であり、軍の比重が高まったことも 派といえる人は一人もいない。さらに古参幹部 である。政治局入りした一〇人の新人の中に文革 た「突撃幹部」がごく少数を除いて姿を消し、長 暫定的な「過渡期の体制」となったのである。 今回の人事の最大の特徴は、文革を跳踊台に 方、鄧小平氏の復活は、毛沢東思想の継承を の御族。とする華国鈴主席との間に対立を生 だが、 その対立点 これら長 7 0

まり、大躍進以前の毛路線を強調こそすれ、大躍進以降の毛思想からはできるだけ離脱することを近し、文革の一面についてもその評価の手直しが「四人組」にかこつけてなされつつある。したが「四人組」にかこつけてなされつつある。したが「四人組」にかこつけてなされつつある。したが「四人組」にかこつけてなされてある。

則で、あまりにも老重視の当然の結果である。いであろう。それは「老・中・青の三結合」の原能性があり、「団結勝利の大会」で成立した華体能性があり、「団結勝利の大会」で成立した華体能性があり、「団結勝利の大会」で成立した華体にであろう。それは「老・中・青の三結合」の原しかし、やや中期的にみれば、すなわち十二全しかし、やや中期的にみれば、すなわち十二全

軍の一部から反発されるであろう。

軍の一部から反発されるであろう。

軍の一部から反発されるであろう。

軍の一部から反発されるであろう。

ないであろう」(八月二十二日付ル・モンド紙)。制は、青年層の深刻な不満を引き起こさずにはいいずれにしても、長期的には「老幹部支配の体

(こいで・よしお=中国問題研究家)

でに両者の歩み寄りがみられる。すなわち華国鋒

が、文革の否定、非毛沢東化にあるとすれば、

中国共産党第 期中央委員会名簿

▽中央委員(二〇一人)

杜義徳 劉春樵、 鄧小平、 許世友、 光濤、 馮鉉、イスマイル・アイマット(司 葉飛、 秀(女)、 平、王世泰、王必成、王光宇、王秀 平、王諍、王猛、王謙、王霞、王 馬興元、ティエンパオ(天宝)、エ 万達、万里、馬力、馬輝、馬文瑞 任思忠、 朱穆之、伍修権、任栄、任仲夷 蘭(女)、呂正操、喬暁光、朱光亜 馬義・艾買提)、邢燕子(女)、呂玉 泉、孔照年、パサン(巴桑)(女)、 尤太忠、 王首道、 丁国鈺、于桑、于明濤、于洪亮、 簡略文字筆画順による)丁可則 華国鋒、(以下の配列は姓の中国 劉興元、劉伯承、劉建勲 葉剣英、 毛致用、 王恩茂、王超柱、韋国清 劉偉、 楊勇、 鄧穎超(女)、孔原、孔石 王茂全、王林鶴、王国藩、 許家屯、阮泊生 江渭清、池必卿 劉錫昌、 劉霞、劉子厚、劉 白如冰、白楝材、 楊成武、 江華、江礼銀 烏爾夫、方毅、 、安平生、 楊易辰 、紀登奎

卿、 李明、 陳雲、 勁光、呉徳、呉全清、呉桂賢(女) 蘇毅然、 銭之光、銭正英(女)、鉄瑛、倪志 饒興礼、 趙蒼璧、 教、胡耀邦、郝建秀(女)、趙志堅 陳慕華(女)、陳璞如、林乎加、林 陳奇涵、 張鈺秀、 張立憲、張廷発、張勁夫、張愛萍、 時輪、張才千、張玉華、張平化、 汪鋒、汪東興、汪明章、宋平、宋 余秋里、 李瑞山、李徳生、蕭華、蕭克、蕭 李任之、李志民、李啓明、李葆華、 并泉、李水清、李世俊、李先念、 楊得志、 イ(宝日勒岱)(女)、宗希雲、 周純麟、周建人、パオジレタ 徐向前、 耿起昌、聶鳳智、 陳丕顕、 林蹬韞(女)、羅青長、 趙辛初、趙紫陽、段君毅 楊靜仁、蘇靜、 張富貴、張福恒、張鼎丞、 姚依林、賀誠、 陳国棟、陳錫聯、陳福漢 谷牧、シャパ(希候巴)、 李達、李強、李子元、 郭玉峰、郭沫若、 陳永貴、 秦基偉 陳偉達 蘇振華、 聶栄臻、 、羅瑞 胡立

> 戴先前 黄知真、 譚震林、 廖志高、 学恭、蔡暢(女)、蔡嘯、 義、魯大東、曾紹山、曾思玉、解 応機、粟裕、 韓英、韓先楚、 恩、康克清(女)、鹿田計、梁必業 廖承志、賽福鼎、譚啓竜、 樊徳玲、 曹里懷、曹軼欧(女)、康世 程子華、 彭冲、彭紹輝、賈 薛金達、霍士廉、 儲江、 廖漢生、 焦林

▽中央委員候補(一三二人)

許彪俊、孫雪梅(女)、紀英林、 道生、劉瑞慶、 輝、劉重桂、 任質斌、 占武、馮品徳、ルジ・トルディ 盧忠陽、申茂功、 爾(女)、鄧華、 ェ(仁増旺傑)、毛信賢(女)、文香 友、王金玲(女)、 王君紹、王尚栄、王金山、王金 林旺丹)、卜谷香、馬明、馬金花 (女)、馬思忠、 (女)、呂儒国、 肉孜·吐爾迪)、呂和、呂存 丁長華(女)、チリンワンダン(七 劉西堯、 劉振華、 王六生、王扶之、 朱紹清、向仲華 江燮元、関沢海 **瓜日耐、左崇義、** 冉桂英(女)、馮 レンズンワンジ 劉志堅、 劉維明、 劉明 劉 姐

平、 冷西、呉金全、岑国栄、 李継良、李耀文、蕭寒、蕭望東、 雲(女)、李成芳、李守林、 俊生、楊富珍(女)、李化民、 杜学然、 楊大易、 楊永良、 鄒家華

陳玉宝、 胡良才、 昕 原、 蘭(女)、 宝娣(女)、程義太、謝正栄、 美英(女)、康林、尉鳳英(女)、 珍、黄栄海、黄新廷、曹思明、 (女)、唐聞生(女)、梅松林、 郭耀卿、 森、徐馳、徐立清、郭鳳蓮(女)、 ラグデ(熱地)、顧秀蓮(女)、銭学 袁宝華、ジャナビル(賈那布爾)、 学全、趙武成、鍾夫翔、賀晋年 周阿慶、 霖、陳愛娥(女)、金明漢、周子健 植弟、張耀詞、陸金竜、陳仁甫、 宋慶友、沈初雲(女)、張震、張令 **呉忠、呉火金、呉向必、呉克華、呉** (女)、李昌安、李学智、李祖根 張懐連、 潘 戴蘇理、 時興、 鄭三生、柳志強、 陳永林、 譚文貞(女)、譚善和、 高厚良、 胡金娣(女)、趙興元、 張林池、張積慧、 魏興政。 薛金蓮(女)、 唐亮、唐克碧 陳先瑞、 胡松、

克、

姫鵬飛、

黄華、黄鎮、黄欧東、

世界遗葬

大正 9 年10月 9 日 第 3 種郵便物認可 昭和29年 2 月19日国鉄東局特別扱承認維註 第2736号 第 58巻 第 36号 通 6 第 2807号 昭和52年 9月 6 日 発行 (毎 週 大曜 日 発行)

時事通信社

特集 中国共産党十一全大会と華体制 ●新聞公報(金文) ●新政治局員・中央委員の顔ぶれ 中嶋嶺雄/小出良夫/北京特派員

連載 手さぐりのカーター像 ②ガラス張りのデタント 小関哲哉

